

C-14 ミシン作業における姿勢(オ2報)

東海学園女短大 西條セツ ○辻 啓子

目的 被服構成実習では作業能率の向上とミシン作業との間には深い関係があると考えられる。前報ではミシン作業時における姿勢について考察を試み、ミシン作業にかなり無理な姿勢を強要されていることが明らかにされた。また被験者の側面からみた針先に注がれる眼の動き即ち作業動作に三つの型がみられ、前報では被験者の最も多いⅠ型について報告した。今回は残るⅡ型、Ⅲ型について検討し、三つの型について比較検討したので報告する。

方法 前報同様被験者は短大生30名を選んだ。ミシンは直針で、糸通しが横方向からのS社ミシン227型と、針棒が前方へ $\angle 9^\circ$ 傾斜し、糸通しが正面からのS社ミシン680型の2機種を用いた。作業は長さ6m、幅6cmの天竺木綿を2枚重ねにしたものをたて方向に直線縫いさせ、作業開始前、糸通し時、作業開始時、作業2分30秒経過時、作業5分経過時の5段階について被験者の正面及び右側面からの姿勢を写真撮影し、考察の資料とした。

- 結果
1. 側面からみた作業姿勢Ⅲ型は作業開始から終了までの間、特に針棒に対して前後の動きが大きく、被験者間のバラツキが大きい。
 2. Ⅲ型の正面からみた姿勢も針棒から離れた変化ある動きを有する者が79%あった。
 3. Ⅲ型に属する被験者は、真面目な緊張型の学生と無計画な弛緩型の学生とに分けることができた。